

原 著

大腸癌 stage IV の原発巣切除例の検討

片山雄介¹⁾, 塩澤学¹⁾, 澤崎翔¹⁾, 沼田幸司¹⁾,
沼田正勝¹⁾, 樋口晃生¹⁾, 五代天偉¹⁾, 森永聡一郎¹⁾,
利野靖²⁾, 益田宗孝²⁾, 赤池信¹⁾

¹⁾ 神奈川県立がんセンター 消化器外科

²⁾ 横浜市立大学 外科治療学

要 旨: 当科における大腸癌 stage IV の原発巣切除例の予後因子を検討した。2000年から2010年までの大腸癌 stage IV 症例で原発巣を切除した244例を対象とした。背景因子は結腸癌171例, 直腸癌73例, 肝転移症例173例, その内 H3 症例は38例, 肺転移症例55例, 腹膜播種症例70例, その他の遠隔転移(遠隔リンパ節, 骨, 副腎, 脳) 14例, 遠隔転移因子数が2個以上の症例が72例であった(重複あり)。3年生存率34.2%, 5年生存率19.4%であり, 生存期間中央値は707日であった。単変量解析では肉眼型が type 1, 2 以外, 組織型が分化型以外, 領域リンパ節陽性, H3 肝転移症例, 肺転移症例, 遠隔転移因子数2個以上, 根治度 C 症例が有意に予後不良であった。これらの因子で多変量解析を行うと, 領域リンパ節陽性, H3 肝転移症例, 遠隔転移因子数2個以上, 根治度 C 症例, 分化型以外が独立予後不良因子となった。大腸癌 Stage IV 症例において, 可能であれば転移巣を含めた根治的切除を行うことが予後の延長に貢献すると考えられた。

Key words: 大腸癌 (Colorectal cancer), stage IV (stage IV), 予後因子 (Prognostic factor)